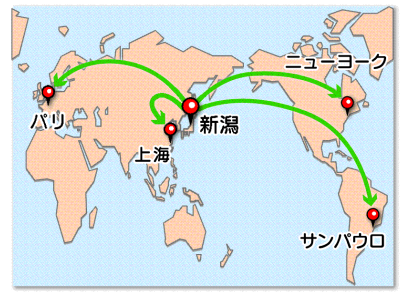
(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

グローバル にいがた

国際交流拠点から

新潟日報社が開設した米ニューヨーク（NY）、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州（パリ）の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をリポートしてもらい、毎月第1月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。



第1月曜掲載

from パリ

柳　由佳莉さん
＝新潟市中央区出身＝

様々な催し日常的に

やっと日も長くなり、花も咲き始めて春を感じられる、うれしいこの頃。怒濤のファッションウイークも終わり今はゆっくり。パリに来てもう12年、私は今、某ブランドの洋服を生産し、パリコレのファッションショーの時期にはさまざまなブランドの服を製作するアトリエで縫製に携わっている。

3月のショーではいくつものブランドからショー用の洋服の依頼があり、某ブランドの、小さい花柄のサテン生地のドレスを私が縫うことになった。

サテン生地はなかなか縫うのが難しい。しかも花柄のプリントの部分が樹脂加工されていてアイロンも手ごわい。それでもなんとか綺麗に仕上げ納品。しかし、そのドレスはアトリエに戻ってきた。

なんと、スカート部分の花柄の柄合わせができていない…という。そんなことは仕様書にもパターンにも一言も書いてない!!と意気消沈している暇もなく、作り直し。2日かけて作った服を2日かけて作り直す。なんともコストが悪いけれど、こんな事はしょっちゅうで、どのブランドもギリギリまでデザインを追求しています）

平日の夜、オテルドビル（パリ市庁舎）の前に集まった自転車イベントの参加者

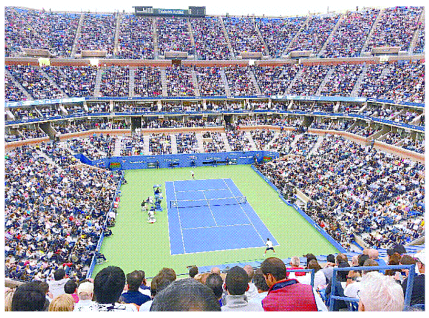
妥協は許さない。

そんなわけで、縫製のアトリエは最後まで本当に忙しい。しかし、私たちが縫った服が颯爽とショーの舞台を歩いているのを見るとうれしいし、疲労はマックス（極限）なのに縫ったかいがあったと思うのである。

さて、パリでは日常的にさまざまなイベントがあり、仕事の後など何かしたければ気軽に行って参加できる。このところ目を引くのは、「誰でも参加型」のジョギング、サイクリング、筋トレなど。筋トレは公園にある遊具で。サイクリングやジョギングは主催者が毎週コースを変えるので、通ったことのない道なども発見できるので面白い。

いろいろな人が参加するので、コミュニケーションを広げるのにとてもいいし、いい汗をかいた後はみんなで、バーで一杯なんてことも多々ある。いろいろな場面で、年齢関係なく初対面の人とでも「サリュ！」で気軽に会話ができるのはフランスの良いところだと思うし、私は好きである。

（柳さんは1984年生まれ、パリのアトリエでクチュリエールとして働いています）



2014年テニス全米オープン決勝の試合風景。コート奥が錦織圭選手

from NY

菅井　佑允さん
＝上越市出身＝

根付くスポーツ文化

ニューヨーク（NY）には北米四大スポーツ（アメリカンフットボール・野球・バスケットボール・アイスホッケー）について、各2チーム、計8チームが本拠地を置いています。

かくいうNYでは「スポーツシーズン」に「開幕」という概念はありません。仮に春先を起点とするならば、野球シーズンの開幕に合わせて、アイスホッケーとバスケがシーズン終盤戦に突入。秋口には野球シーズンがクライマックスを迎えるさなかに、全米随一の人気を誇るアメフトが開幕、と文字通り年がら年中スポーツを楽しむことができるからです。

ここのところNYの各チームの成績はやや寂しいものではありますが、それでも街中では各チームのサポーターがユニホームや帽子を身に着けながら歩く姿、スポーツバーではファン同士が舌戦を交わしながらお酒を飲む姿、スタジアムでは老若男女問わず選手の一挙手一投足に熱狂する姿があり、いかにスポーツが生活の一部として根付いているかを強く感じることができます。

実際に私が仕事上で接する方々ともまずはビジネスの話はさて置いて、スポーツの話で意気投合することが、実はビジネスを円滑に進める上で極めて重要であるということを、身を持って感じることも少なくありません。

四大スポーツに限らず、NYではテニス（全米オープン）、ゴルフ、ボクシングといった世界的スポーツのビッグイベントも開催されます。特に近年はテニスの錦織圭選手、ゴルフの松山英樹選手といった日本人プレーヤーの活躍もあり、私を含む日本人のNY駐在者には、この両選手がNYでプレーする8月末～9月前半を楽しみにしている方も少なくないのではないでしょうか。

私はこれらスポーツ観戦の間に自らもゴルフに興じ、まさにスポーツとともに1年を過ごすわけですが、そうこうしていると1年がたつのはあっという間で、私も着任からはや3年。いずれこの地を離れ、また別の地に赴任することになるまでに、NYにてより多くのスポーツ文化に触れたいと思う今日この頃です。

（菅井さんは1984年生まれ、2013年より日系金融機関のNY支店に勤務しています）

from 上海

大島　陽一さん
＝新潟市北区出身＝

交通マナー向上願う

中国に出張や旅行に来られた方なら中国の交通ルール、マナーには驚かれると思います。クラクションが鳴り渡り、信号は守らない、車線は有って無きがごとく、時には逆走もあり、歩行者信号が青であっても右折車、左折車がどんどん突っ込んで来るし、電動自転車のようなものは音もなく歩道を横切り、横断歩道の青信号はまさに注意して渡れ、です。

かくいう私もタクシーでの追突は何度か経験し、高速道路での接触にも遭いましたが、幸いけがもなく済んでいます。

ただ、慣れてくると、車に乗っていても横断歩道を渡っていても、それほど恐怖感というものを感じなくなってきます。

確かに小さな接触事故はよく見かけますが、街中では大きな事故というものがあまりない。皆がルールをきちんと守らないため、逆に運転手は慎重に運転しているし、歩行者も注意しながら横断歩道を渡っている。車が行き交う道路の真ん中を歩いている人もよく見かけますが、ひかれることはほとんどない。このような状態でうまく回っているという感じです。

交通ルールを守るということよりも、車同士はぶつからないこと、人はひかない、ひかれないことが最低限のルール？となっており、それ以外は何でも大丈夫という考えが根底にあるように思われます。

年間2400万台と世界一の自動車販売大国となり急速に車社会となった中国は、渋滞やPM2・5をはじめとする環境問題も深刻化しています。政府が大都市圏でのナンバープレート制限（上海ではナンバープレート1枚が入札でなんと約8万元≒140万円）や、電気自動車への補助金やインフラ整備を進めていることは日本ではあまり認知されていないと思われます。

交通マナーについても最近、免許試験にマナー試験も追加されたとのこと。現在「新常態」の名の下、徐々に安定成長へとかじを切っていますが、環境問題の解決と併せて、交通マナーについても時間をかけて徐々に向上していくことを願うしかありません。

（大島さんは1960年生まれ、上海にある三菱マテリアル社の営業部長です）

電動自転車やバイク、車が道路を埋める、上海の朝の通勤風景

音楽会で演奏を披露する子どもたち。ブラジルでは「褒めて伸ばす」のが主流のようだ

from ブラジル

矢崎　愛さん
＝新潟市北区出身＝

褒めて認める国民性

ブラジルでミュージシャンになってもうすぐ15年になる。いろいろな先生に音楽を習い、たくさんの生徒にピアノを教えてきた。日本とはまったく違う文化の国、はじめはびっくりすることばかりだった。

8歳の黒人の女の子にピアノを教えたことがあった。切れ長の大きな目、シャイなかわいらしい子だった。ペダルの使い方が間違っていたので指摘すると「私には私のやりかたがあるから」と悪びれずに言う。またあるとき、その子が「曲に歌詞をつけたよ」と一枚の紙を私に渡した。読んで「ステキだね」と返そうとすると「それはあなたにあげる」と紙にサインしてくれた。

忘れられない先生もいる。一人は18歳のときに知り合ったヒカルド。豊かなひげをたくわえた若い先生で、当時私が住んでいた農場に合唱指導に来ていた。「これがサンバ、これがフレーボ」とピアノでいろいろなリズムを弾きながら、横に立つ私の方をじっと見つめる（ブラジルのミュージシャンはこれが得意）。私は目を丸くして聞き入り、片っ端からまねた。

もう一人は私がサンパウロで仕事を始めてから出会ったシーロ・ディアス先生だ。優しく深い瞳の、大きな体の初老の先生だった。クラシックのスペシャリストで、彼の弾くショパンのノクターンを聴いたとき、初めの二つの音が鳴っただけで時間が止まったように感じた。

最初のレッスンで「あなたは素晴らしい。輝いている！」と言ってくれたことをよく覚えている。私は涙が出そうになった。子どもにも「あなたはピアニストだよね！」と言った。するとその子は背筋をぴんと伸ばし、実にうれしそうに誇らしげな様子で弾きだす。

どちらの先生も初めから私を受け入れてくれた。褒めて認めるブラジル。初心者も小さくならないし一流のプロも気さくな人が多い。「頑張る」という言葉もなくて、こつこつ努力する文化はあまり根付いていないけれど、みんな伸び伸びしている。ブラジルはいいなあ、という思いと日本人でよかったという思い、どちらも感じながらこの国で暮らしている。

（矢崎さんは1977年生まれ、サンパウロ在住のミュージシャンです）

ローマ・イタリア歌劇団
G.プッチーニ　ラ・ボエーム
LA BOHÈME
指揮:カルロ・パッレスキ　出演:ローマ・イタリア歌劇団
賛助出演:新潟市ジュニア合唱団
原語上演・日本語字幕付き
6月28日(火) 19:00開演 (18:30開場)
新潟県民会館 大ホール
新潟市中央区一番堀通町3-13
チケット販売中
チケット(全席指定・税込) SS席 16,000円／S席 13,000円 A席 10,000円／B席 7,000円
〈チケット取扱い〉インフォメーションセンターえん(メディアシップ1F)、新潟県民会館、新潟伊勢丹、文信堂CoCoLo万代(新潟駅地下)、トップトラベル新潟(デッキイ 401内)、チケットぴあ(Pコード:290-245)、ローソンチケット(Lコード:31716)、イープラス、FOBチケット http://www.fobkikaku.co.jp/、セブン-イレブン(セブンチケット)、りゅーとぴあ、りゅーとぴあチケット専用ダイヤル 025-224-5521(11:00～19:00/休館日を除く)、りゅーとぴあオンラインチケット http://www.ticket.ne.jp/ryutopiaticket/　※NIC新潟日報販売店でも取り次ぎます。
主催／ＮＳＴ、(公財)新潟市芸術文化振興財団　共催／新潟日報社
問い合わせ先／ＮＳＴイベントインフォメーション TEL.025-249-8878(平日10:00～18:00)、新潟県民会館 TEL.025-228-4481

「春おぼろ」禅田一穂

「月下朗朗」柴田長俊

第42回 春季創画展
日本画は自由だ、創画会。
●5月7日(土)―15日(日) 午前10時～午後5時［会期中無休］
●NST 1階ギャラリー・3階 特設会場 新潟市中央区八千代2-3-1
●前売り券(税込) 一般500円(当日券700円) 中学生以下無料
〈プレイガイド〉インフォメーションセンターえん(メディアシップ1階)、新潟伊勢丹、文信堂CoCoLo万代(新潟駅地下)
※NIC新潟日報販売店でも取り次ぎます。
前売り券販売中

ギャラリートーク
創画会会員 柴田 長俊
5月7日(土) 14:00～
※事前予約不要

ギャラリートーク
「日本画の画材とその可能性 ―新潟県展審査をして―」
5月15日(日) 14:00～ ※事前予約不要
宮城 真・柴田 長俊・藤田 志朗

主催／新潟日報社・ＮＳＴ・(一社)創画会　後援／新潟県・新潟市　問い合わせ／NSTイベントインフォメーション TEL 025-249-8878(平日10:00～18:00)